

## 50 【やまだのかかし】

村のどのたんぼにも、どのはたけにも、かならずが [かかし] が立  
ててあります。

おもに鳥よけ魴（いたち）よけですが、たまに泥棒（どろぼう）よけ  
にもなります。

たんぼやはたけを荒らす泥棒は、ほとんど町の若者で、ろくに [かか  
し] なんかもみたことがないから、夜中に忍び込んで、懐中電灯（かいち  
ゆうでんとう）を [かかし] に当てて、腰をぬかすそうです。

ところがあるとき、村の [かかし] が盗まれる、ということがつづい  
て、完ちゃんとはくは、

「ありゃあ、まちのもんのしわざじゃろ」

といていたものですが、あるとき、

「金ちゃん金ちゃん、てえへんだ」

と、銭形平次（ぜにがたへいじ）のこぶんさながら、完ちゃんがかけ  
こんできました。

「みたぞみたぞ」

「なにをみたんか」

「どろぼうじゃ」

「やっぱし、まちのもんじゃろ」

「それが [かかし] なんじゃ」

「なんじゃと。[かかし] をぬすんだのは、[かかし] かい」

完ちゃんいわく、その泥棒 [かかし] は、真っ昼間に、山のほうから  
飛んできて、たんぼやはたけの [かかし] を、かたっぱしから、かっぱ  
らっていったとのこと。

たんぼやはたけの [かかし] よりも、ずっとみすばらしいなりをして  
いるけれども、何倍も大きかったとのこと。

完ちゃんがみているのを知ると、その泥棒 [かかし] は、不気味（ぶ  
きみ）な声で高笑いしたとのこと。

かかか

かかか

かかか

かかか

完ちゃんには、こうもきこえたとのことでした。

からすがこわくて

かかしができるか

かんちゃんこわくて

かかしができるか

すぐにふたりして、懐爺のところに行きました。

「完ちゃんがみたおばけは、【やまだのかかし】ですね」

「[かかし]のおばけかい」

「【やまだのかかし】は、[かかし]のおばけというよりも、正確には、[かかし]の霊の塊(かたまり)なのです。[かかし]も古くなりますと、だんだんと、おばけ化してきます。それらの霊のかたまり。【やまだのかかし】が、古くなった[かかし]を盗むのは、もう用がなくなった老[かかし]を、つまりおのれの霊魂(れいこん)を、姥捨山(うばすてやま)に捨てるために、盗むんです」

「よくわからんが、せつないのう」

ぼくがいうと、完ちゃんも、

「そういえば、あのたかわらひは、せつなくきこえたのう」

といったものでした。

「金ちゃんも完ちゃんも、新しくて、きれいな[かかし]をみると、いさましいなあ、たよりになるなあ、とおもうでしょ。でも、古くて、きたない[かかし]をみると、なさけないなあ、やくにたたんだろなあ、とおもうでしょ。そういうことは[かかし]自身が、もっとわかっていることなんです。だから、【やまだのかかし】なんておばけがでてくる。けっきょく、おばけは、人間がつくりだすものなんですから」

このときからぼくは(たぶん完ちゃんもそうだろうが)、[かかし]のことを、めちゃくちゃ好きになったのでした。